
彼へ綴るこの想い

元号四年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼へ綴るこの想い

【Nコード】

N2343Z

【作者名】

元号四年

【あらすじ】

幼馴染の少年への気持ちを書いてみました。いやー、女心って難しい。

あなたと初めて出会ったのはいつのことだろう。

物心ついた時には、あなたは私の側にいた。今と何も変わらない、優しい笑顔で私に微笑んでいた。

私もあなたと一緒にいるのがとても幸せで、だけど、自分の気持ちをあなたに伝えるのがとても苦手だった。

いつも高慢な態度であなたを困らせて。本当は、たくさん大好きって伝えたかったのに。

それでも私は、自分の気持ちに素直になれなかった。

馬鹿な話よね。

でも、あなたはいつでも私の側にいてくれて。

あなたは、いつでも私の側で笑ってくれていて。

その笑顔を見るたび、私は激しい罪悪感に苛まれていた。

本当はあなたも人並みに恋をしたかったはずなのに。

本当はあなたも、私みたいな可愛げのない女と接するのは嫌だったはずなのに。

高校を卒業してあなたと離れてしまった時、私は悲しい半面少し

喜んでくれた。

これで、あなたは私と関わる必要が無くなる。

これで、私は不必要にあなたを苦しめることが無くなる。

でも、どうしてなんだろう。

嬉しいはずなのに、身を引き裂かれるような痛みを感じる。

嬉しいはずなのに、涙が溢れ出して止まらない。

でも、それをあなたに覺られたくなくて。

これ以上、あなたに迷惑をかけたくなくて。

だから私は、彼の心配そうな顔を見て、気丈に、

「大丈夫よ。そもそも、あなたに心配して貰う必要なんてこれまでも一度たりともなかったんだから」

そう言ってしまう。

あなたは全てを見透かしたような顔をしていたけど、私はもう一度「大丈夫」という。

けれど、本当は大丈夫なんかじゃない。

あなたが私のもとから離れて行っちゃう。それだけで、涙が溢れそうになる。

本当は私の体を抱きしめて、優しい言葉で慰めてほしい。

けれど、あなたは鈍感だから。

私の気持ちになんて、どうせ気付かないのね。

でも、このままで終わるのも嫌。

どうせ終わるなら、悔いの無いようにして終わりたい。

あなたは私の側にはいられない。

私もあなたの側にはいられない。

それはもう分かってる。

けれど、最後に一つだけ。

あなたに、私の本当の気持ちを。

あなたのことが、大好きだよって。

これは叶わない恋。

数年も経てば、あなたはもっといい人を見つけて、その人と幸せ

な家庭を築いているんだろう。

そこに私が入り込む余地はない。

いつかきつと別れは訪れる。

それが、偶々今日だっただけ。

「じゃあね」

私はそう言って彼に背を向ける。

これで何もかも終わり。明日からは、私は一人で、あなたの助けなしに生きていかないと。

じゃないと、私はいつまで経ってもあなたを頼ってしまおうから。

そう自分に言い聞かせないと、今すぐにでも大声をあげて泣いてしまいたいから。

だから、これで終わりに――

「待てよ!」

私の手首を彼の大きな手がつかむ。けど、私はそれを力強く振りほどく。

今の状態で引き留められたくないから。

今優しい言葉をかけられたら、絶対泣いちゃうから。

だから、早くこの場所からいなくならないと。

早くしないと、決心が揺らいじゃうから。

なのに、どうしてなの？

どうして、私の体は動こうとしてくれないの？

もう期待なんてしたくないのに。

あなたの前で、泣き顔なんて見せたくないのに。

それでも、私は期待してしまう。

あなたが私に優しい言葉をかけて、引き留めてくれるんだと期待してる。

そんなはずはないのに。彼はとても鈍感だから、私の気持ちなんて知ってる筈はないのに。

それに、彼も——私のことが好きな筈なんて無いのに。

「なんなんだよ……突然お別れって、どういうつもりなんだよ」
「どういうつもりも何も、それが私の気持ちだよ」

嘘だ。本当は、あなたとお別れなんてしたくない。

無駄に過ごしてしまった時間を、穴と一緒に埋めて行きたい。

今まで素直に甘えられなかった分、あなたにいっぱい甘えたい。

けど、それは過ぎた願いだから。

私には、あなたをこれ以上縛ることなんて出来そうにないから。

今ここで甘えたら、私も、彼も、二度と離れられなくなるかもしれない。

「あなたも私のことは忘れて。私も、あなたのことは忘れるから――」

そう言って、私は今度こそ彼に背を向けて歩きだす。

もう彼は追ってこない。

もう私は振り返らない。

これからは、それぞれの人生を――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2343z/>

彼へ綴るこの想い

2011年12月8日14時53分発行